

実践的な能力開発を考慮した新規授業の開設における創意工夫

畠 一樹

(徳島大学高等教育研究センター・キャリア支援部門)

1. はじめに

近年、新卒社会人に対して専門性に加えて汎用性が求められる中、特にコミュニケーション能力に対するニーズが高くなっている。この能力は、社会人だけでなく在学生の正課内外の活動を含めた人生全般のキャリア形成において影響するものと考えられる。在学中は、この能力を必要とする難局に遭遇しても、あえて向き合わずに回避できる傾向もあるが、社会人以降において、その回避の蓄積が大きな反動となって表面化することが懸念される。また、本学の教育目標では「進取の気風を身につけた人材」が謳われているが、その気風を醸成するためにもコミュニケーション能力の開発は重要な意味を持つ。そこで、大学入学直後からコミュニケーション能力の開発機会を創出するために教養教育科目「コミュニケーション入門」を新たに開講することが決定した。

本科目の開設にあたり、知識の“習得”のみに終わるのではなく、実践的な体験を多角的に加えながら、進取の気風を身に付けた活動に取り組むマインドとスキルを“修得”するための創意工夫を行った。本発表では、新規科目の開設にあたり創意工夫した内容を報告する。

2. 授業開講に対する学内外のニーズ

(1) コミュニケーション能力に対するニーズ

経済界からのニーズとしては、日本経済団体連合会の新卒採用に関するアンケート調査結果で最も重視されている能力が「コミュニケーション能力」であることが挙げられる。また、経済産業省が提唱する社会人基礎力でも「発信力」と「傾聴力」（統合するとコミュニケーション能力）が定義されていたり、筆者らが実施した雇用主インタビューを実施した中でもコミュニケーション能力の開発に対するニーズは高い。

一方、本学学生に対するキャリア形成のアンケート調査結果などからも高いニーズが伺える。

(2) 社会的反響（共感）

本科目の開設にあたり、コミュニケーション能力の開発を目的として、多様な社会人との交流環境を創出することに対して、学外の企業人などから高い共感を得ている。さらに、その共感を動機として講師やゲストスピーカーとして授業運営に主体的に多数のご協力を頂けることになった。

3. 授業の概要

コミュニケーション入門は2022年度前期から本学の教養教育科目（選択科目）で新設される。主な履修対象者は入学直後の1年次学生で、最大定員は40名を想定している。以下では、授業概要のうち到達目標と授業計画について述べる。

(1) 到達目標

本科目はコミュニケーション能力の開発を目的としており、知識の習得のみをアウトカム目標とした場合は、能力開発という目的を十分に満たさない。そのため本科目では、「わかる」という知識習得段階から「やってみる」というキャリア形成の第1段階まで踏み込む（図1）。これにより、未経験による不安感などから実践行動に踏み込めない課題を克服して、「できるかもしれない」といった自己効力感や成長に対する意欲をマインドセットする。さらに、マインドセットの根拠となるスキルの体感や獲得も実現する（図2）。以上から、在学中のキャリア形成がより活性化し、コミュニケーション能力の開発を「やってみる」から「できる」、さらには「活躍する」段階まで持続的に成長する期待が高まる。これらを背景とした本科目の目標設定を以下に列挙する。

①同じ視野の中でも今までの感性では認識できなかった「視点」を補うとともに、1人称から2・3人称までの多角的な「視座」も備える。さらには、目に見える物質的なものだけではなく、目に

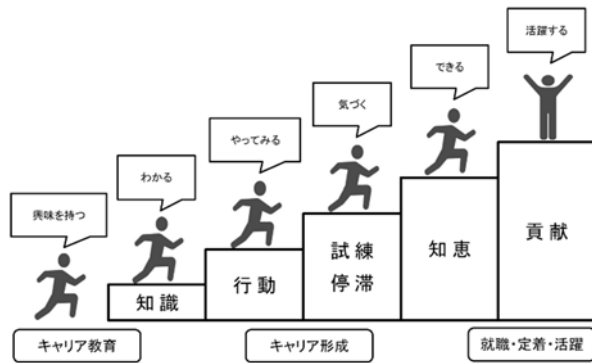


図1 成長の階段

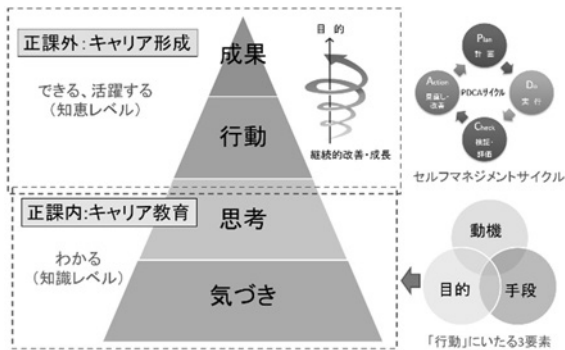


図2 キャリア教育からキャリア形成への連動

表1 授業計画

1. オリエンテーション	9. 前半の振り返りと後半へのマインドセット
2. コミュニケーションの意識	10. SEQ目標づくりシートの作成
3. ゼロベース思考	11. 社会人とのコミュニケーション1：基礎編
4. 視座の転換	12. 実践で浮上した課題と解決策の検討
5. 価値観の言語化	13. 社会人とのコミュニケーション2：応用編
6. 共感とエンゲージメント	14. SEQ目標づくりシートの修正と完成
7. チームビルディング	15. 総括（全体の振り返りと今後のマインドセット）
8. スチューデントEQ（SEQ）の解説	

見えない精神的な価値観や強みなどを言語化するための「感性」も備える。

②お互いの価値観に共感し、互いに違う強みを補完しながらエンゲージができる。

③コミュニケーション能力の開発に関連性が高いEQ（心の知能指数）の現状をSEQという客観的能力検査で把握し、なりたい姿を実現するためのセルフマネジメント手法を修得する。

(2) 授業計画

図2と表1に示すように内面（マインド）から外面（スキル）へ、そして思考から行動へ、意識の範囲を広げながら実践レベルに到達するための成長の階段を設けている。そして、本科目の目標を考慮しながら、「わかる」ではなく「できる」という手応えと自己効力感を備えるために多様な社会人の協力による臨場感を確保した。

4. 授業内容の主な創意工夫

多様な講師やゲストを招聘しながら、実践的で臨場感の高い講義を実現するために創意工夫した内容を以下に列挙する。

- (1) 優れた実績がある企業人事の立場から採用や研修時に近い設定で価値観や強みを引き出す。
- (2) 社員研修レベルの実践的なチームビルディングに取り組み、グループとチームの違いを知る。
- (3) コミュニケーション能力の開発に関連性が高いEQの現状を客観的能力検査で把握し、教員（縦の関係）、学生（横の関係）、社会人（斜の関係）が調和した環境の中で、学びと実践を交互に繰り返しながら能力開発のセルフマネジメント手法を修得する。
- (4) オンライン技術を取り入れ、県内をはじめ県外からも授業への協力者（講師、ゲストスピーカー）を招聘する（履修者数が最大定員を満たせば30名程度の招聘を想定）。

(5) 授業終了後のキャリア形成の支援体制も整えている。学内では、キャリア形成支援の専門部署であるキャリア支援室やEQによるセルフマネジメントを支援する生協が引き続き相談の窓口になる。将来的には、本科目を履修した生協の学生サポーターによる授業サポートも想定している。次に学外では、コミュニケーション能力を特に重要な能力としている県内企業から講師を招聘しており、仕事体験やアルバイトへの連携も可能になる。さらに、県外企業では出身者の多い兵庫県や大阪府の企業の招聘を予定しており、低年次のうちからインターンシップや会社見学などの社会観や職業観の醸成の機会を設ける。

5. 今後の展望と課題

本科目は次年度に新規開講されるので逐次改良しながらの運営になるが、それに加えて中長期的視野では、在学生、卒業生、就職先を対象とする教学アンケートなどのデータを分析しながら、継続的に教育の質を改善したい。また、将来の展望として社会人の学びなおしや社員研修プログラムなど社会貢献への展開も期待している。